立山温泉遊記

白門生　著

この「立山温泉遊記」は大正六年七月十七日から同二十日までの三泊四日の立山温泉行の記録で、同年七月二十三日から八月二日まで十一回にわたり富山日報紙面にコラム記事として掲載されたものである。

筆者は「白門生」とあり、他二新聞社との合同取材行であった様で北陸政報の魚住記者、タイムスの渋谷記者の名は文中より伺えるのだが、筆名しか記されていない。

八十六年も前の、富山から立山温泉に至るまでの道筋に沿った山村の情景風俗が簡潔な味わい深い文章で活写され、更に常願寺川最奥の砂防工事事情や、往時の立山温泉の様子が詳細に記されていて、鮮やかに昔日を蘇らせてくれる。

※旧かな使いは、原文の味を損なわぬよう可能な限りそのままとした。

目次

一　横江まで
二　芦峅の一泊
三　荒廃せる閻魔堂
四　鬼ヶ城瀑下の昼食
五　愈（いよいよ）温泉に着す
六　温泉の大宴会
七　大鳶山に登る
八　本年度の砂防
九　温泉半日の休養
十　温泉を辞す
十一　立山鉱業の事業

立山温泉遊記（一）

▼横江まで

◎立山温泉は今回十万円の株式会社となり、今後大に設備を改善して発展を試むるから、まだ立山の開きをせぬ前、温泉の静かな時に予定であるが、是非記者団の視察を願ひたいと、立山温泉なとかの事であった。

◎我一行は、北陸政報の魚住君、タイムスの渋谷君、及余の三人は十七日午、高岡新報の方は急に用向が出来て果さなかった、三人は零時四十分富山発の下り列車で出発した、草鞋も笠も皆芦峅で用意すると云ふので、渋谷君と余は靴、魚住君は羽織袴に下駄と云ふ扮装である。

◎滑川に着すると、立山軽鉄の青山君、滑川商工会の八尾君及我社の宮崎君などが出迎はれて八尾君は我々に滑川の名所絵葉書及同町二大奇観の冊子を贈られた、我々は直ちに立山軽鉄に乗換へたが、三君も我々を見送る為め同車せられ、八尾君は中滑川で下車されたが、青山宮崎両君は五百石駅まで同車された。

◎二時過ぎ五百石駅へ着くと温泉関係者の杉木信行、金木冶一郎、菅原徳太郎の諸氏が出迎はれた、駅前の茶屋で氷水に渇を醫し、汗を斂めた上俥に乗って出立した、杉木菅原両君は温泉案内の為に同行された、此日は可なり暑い日で車上にあっても汗が流れる、箸箱のやうに細長い町を南へ南へと行く、道路が悪い上に上り坂と来て居るから、車夫は一方ならず苦しむ、間もなく町を離れた、道は益々悪く、岩礁のやうな石が道の真中に累々として散在し、俥を提灯のやうに振り、又セメントの灰のやうな粉砂が深さ一二寸もあって、車の轍について煙のやうに立揚がる、俥は牛歩遅々として進まぬ。

◎途中釜ヶ淵の信用組合で休憩した此組合は其筋から表彰された模範組合で、床には平田東助子の書いた幅が懸って居る、理事金山政範君が出て一行を歓待された、一行は再び俥に乗って南進を続け、立山村宮路の宮で二度目の休憩を為し、其れから金山従革氏邸の前を通り一二の部落を過ぎて横江と云ふ処に着き地蔵堂傍の茶屋で三度休憩した、車夫は之れより先は俥は行かれぬと云ふ、芦峅までまだ二里もある、最初我々は芦峅まで俥で行けると聞いて居たのに茲に至って当惑したが致し方が無い、依って此処で草鞋に履換へ、人夫を雇って手荷物を背負はせ、一行五人勇を鼓して膝栗毛に鞭った。

▼芦峅の一泊

◎牛歩遅々たる俥に提灯のやうに振られて乗って居るよりも、徒歩の方が却って心地良く、且つ歩みも早かった、最早時計も四時半を過ぎて居る、道の右は常願寺川、左は山で、山の森林には蜩が盛んに鳴いて居る　五人の一行が語りながら行くと何時しか千垣村に着いた、千垣は芦峅寺より約一里手前の村で、今日は田祭りだと云ふので村の人々は皆ブラブラ内に外に遊んで居た。

◎千垣から半里計りも行くと芦峅寺から人夫が迎ひに来た、間もなく芦峅寺村に着き、寳泉坊と云ふ宿に入ったのは六時半頃であった、徒歩した道は遠くもないが、俥で強く揺られた為可なり體が疲れて居た、草鞋を解いて座敷へ上った、宿屋と云った処で立山登山者の為めに普通の民家が宿屋の免許を受けて居ると云うだけで、総ての感じが山家で一泊を乞ふたと云ふ気分である。

◎此時砂防の副主任久保技手が訪問された、久保君は我々に砂防工事を案内すべく、態々（わざわざ）立山温泉から此処まで迎ひに来られたのである、我々は風呂に入ってから大宮境内へ散歩に行った、大宮は即ち此村の鎮守で其由来は昨年詳しく書いたから再び茲に繰返す必要はない、只其荘厳無比の神苑、亭々として天を摩する幾百本の大杉は何時見ても神々しき感に打たれる、渋谷魚住両君は初めてであるので寧ろ驚異の眼を瞠り、此んな立派な霊境が富山県にあるとは知らなかったと嘆称して居た。

◎宿に帰ると最うランプが點いて間もなく夕食の膳が出た、一二杯傾けた時、之れも我々を案内する為めの寺井県書記が富山から

自転車で到着された、我一行には左党の勇者が居る、杉木菅原両君の如きは其れで、殊に菅原君は稼業も酒屋で其底力量るべからずである、山宿の料理なれば我々が平素味ふ事の出来ぬ珍しいものが多く、其中でも独活の胡麻アヒは最も風味があったので、一行中の某氏が給仕の女にお代りを要求し、お生憎様を食ったなどの愛嬌もあった。

◎一座のメートル大に挙がらんとする時、この村の佐伯静君が支配人の佐伯輝光君を我々の処に派して、慰労としてビール一打を贈られた、静君は現に金沢市に出て米穀仲買人を為し成功者の一人であって、目下此村に宏壮なる家屋を建築中である、尚静君は故郷の発展を図らんが為近頃此村に立山信用株式会社を興し、前記の佐伯輝光君は其常務取締役である、我々は輝光君より此村の歴史伝説等に就いて極めて趣味ある話を多く聞いた、何分にも此村の大宮は佐伯有頼が立山開山の当時造営したものだと云はれる位であるから詳しく調査したら多くの歴史的事実を発見するに相違あるまい。

◎斯くて我々は夕食を済ましたのは漸く九時半、明朝は早く出発すると云ふので十時頃寝に就いた、蚊は少ないけれど蚊帳なしには寝られぬ。

立山温泉遊記（三）

▼荒廃せる閻魔堂

◎芦峅寺村は立山登山者に取りては最も大切な村である、之より奥には最早人家が無いから登山者は皆此村で一泊し、登山の準備を為さねばならぬ、此村は海抜千五百尺の山中にあれど、戸数は百四十戸もあって山奥には珍しい大村である、登山者の為に村内全部宿屋営業を為し、旅舎取締所などもある、維新前迄は芦峅寺に三十六坊、岩峅寺に十二坊合わせて四十八坊の僧舎があり、皆立山に付属して居たのであるが、立山権現が神社となると同時に皆神官となって、今尚僧侶で居るのは芦峅寺に二軒しかない。

◎村民は自ら立山の開祖佐伯有頼の後裔なりと称して、大部分佐伯姓を名乗り、全村百四十戸の内百戸余りは佐伯姓、三十戸が志鷹姓で、外に数戸異なった姓はあるが、之は此村の古有の住民ではなくして他から移住したものである、此村では斯く同姓が多い為に同姓同名が非常に多く、殊に女子に於て最も甚だしく、実際上甚だ困る事もあるさうである。

◎明くれば十八日、大勉強で五時に起床した、此村の人は朝食を早く出す事には慣れて居るので、顔を洗ふと直ぐ膳が出た、而して大きな握り飯が恰もお土産物の如く差出された、此処で一行は全然服装を換へ、草鞋、脚絆、笠、茣蓙、金剛杖等に身を固めた、聊か物々しい扮装である、昨日の一行五人に比し今日は東同役（ママ・同道役の誤記か？）の久保技手、寺井県書記並に釜ヶ淵信用組合の金山政範君も我々が出発間際に来て加わった、斯くて我々は六時に寶泉坊を出て、大宮境内で記念の撮影を為し愈よ芦峅寺村を出発した。

◎佐伯輝光君は我々を村外れまで見送られた、村を離れる処に閻魔堂と云ふのがある、昔し僧坊時代の舊跡（旧址）で、以前は此

付近に中宮寺、姥堂其他三途の川だの布橋だのと冥途に象った種
ん なものがあったのだが、今は之を知るものさい（ママ・さえ）
稀である、閻魔堂の如きも大抵の登山者は之を逸して見ない、我
々は佐伯君の案内に由って幸ひ之を拝見する事が出来た。

◎村外れの左手に少し小高い処があって、其処へ上ると夏草茫々
と生茂り、其中に間口四五間奥行三間計りの物置やうな粗末な建
物があり、其れが即ち閻魔堂で、入口の板戸を開けると、其処に
昨日あたり桶屋が仕事をして居たと見へて木屑竹屑さては肥桶の
やうなものが乱雑に転がり、又隅の方には茅を一ぱい積んである、
而して其奥の方に高い壇が設けてあって其処に閻魔大王が、五躰安
置してある、昔は十大王と云って十躰あったそうである、正面の大王は
五躰は何れかに紛失して現在あるのは五躰である、其内
新しく塗換へてあるが、他は昔の儘で処々蝕はれ、古色蒼然たる
もので ある、昔から小野篁（おのたかむら*注：小野小町の祖父。）
篁は、毎晩冥府に通い、閻魔王庁で裁判を手伝っていた人物とし
て も知られる。隠岐へ流されるとき、「わたのはら八十島かけてこ
ぎ出ぬと人には告げよあまの釣船」という歌を詠んだのは有名。）
の作だと言伝へられて居るさうだが、兎に角珍らしいものである、
芦峅の人は此由緒ある偶像を瓦石同様に捨てて顧みず、其堂内も
殆ど村民の蹂躙に委してあるのは誠に勿体ない事である、何とか
永久に保存の途はないもの乎。

立山温泉遊記（四）

▼鬼ヶ城瀑下の昼食

◎閻魔堂を出て常願寺川に沿ふて進む、道は昨年砂防道路と
県 修繕した為山路と思はれぬ程坦々なと
橋 まで人力車を通す事は決して困難ではあるまいが、居る、道
荷 馬車なども多少困難で限軌道を通れぬ、比幅が狭いから芦峅寺
荷 馬車及ぶ車を除けるに来る為藤
と 地盤の固い処は変わりはない式無限軌道を聞くとめて
け る と軽いと云ふ。皆例の高松式無限軌道を聞くとめて

◎芦峅寺から藤橋まで実測一里一五町あ
一 時間余りに藤橋は称名川
で 昔は藤蔓でし て藤橋に着いた、藤橋は称名川
防 道路出来たで吊っ て藤橋あるからビ
山 温泉の架かっ て藤橋かたて居るの ルやがま
ひ に番頭が居る で あるか ダ
な 称 名川の清瀬で顔を洗ひ、其れしの番頭が居る、橋のるか ら 汗 出る程 を で 御 馳 走
に が 、 ひ 、 休憩 し た 、 ま だ 此 処 に 来 て 附 が 、 て 出 で 我 々 を 迎 い
な っ て 大 に 元 気 を 培 養 し た 。 山 温 泉 の 荷 物 取 扱 所 が あ っ な 木 橋 が ら 比 名 の 川 る 、 坦 途 で あ る 近 に 行 に 立 砂 橋 ら

◎約三十分も休憩してから藤橋を出発した、途は漸次爪先上がり
で 日 あ 盛 り た で 、 あ る で 、 か ら 自 分 は 珍 し い 事 も く な る と な り に て 、 比 す れ ば 難 渋 で あ し た 、 昨 年 県 改 修 し て 余 り に 、 比 し て 昨 年 通 は 至 極 善 い 道 近 く な る が 、 比 辺 総 魚 住 て 両 君 は て か り
且 つ 道 城 の 嶮 嶮 な り 、 一 行 大 分 苦 し れ さ を 感 じ た 。 嶮 路 を 下 漸 初 見 参 っ た 途 で い 道 あ り と 川 と 云 ひ 将 瀧 な い っ た 物 珍 し さ う は 昨 か り

る処に有名な鬼ヶ城の瀧があって其下に行くと青嵐はシブキを吹いて冷涼水の如く流汗が頓に（とみに）歛った（おさまった）。

◎少し時間は早いが茲で飯を食ふ事にした、人夫の背から芦峠の宿で貰った南瓜のやうな握り飯を取出すと杉木君は缶詰やら酒などを取出して、涼しい瀧の下で簡単な宴会が始まった、盃は二つしかないので一人が飲んで居ると一人は羨ましさうに見てゐると云ふ云ふ始末、寺井君此有様をレンズに収める、時間が充分あると云ふので彼此れ一時間も此処に費した。

◎十二時過ぎに鬼ヶ城を出発し、途中一二回休んでに着いた、此処は立山温泉より約一里の手前で砂切れ運ぶ、坂又人夫の山道を平気で運ぶのは実に人間業とも思われぬ位であるまでん一里登むるる急でのが多いものに強力な奴はは其の一本を担いで水谷から三温泉ま積ら苦しかの道は一層嶮しくなる、九十九折の坂を登ったり降ったり、約十町計り行くと白岩瀧の処へ来た。

立山温泉遊記（五）

▼愈（いよいよ）温泉に着す

◎白岩瀧は湯川の本流にあって上下二段となり、上のは高さ八十

五尺、下のは二十尺、何れも幅は四五間乃至七八間あり、而して例の五万圓を費し、昨年余の工事は大部分出来上がって落下し、閉鎖し尚此処へ来た頃は砂防堰堤の上を通じて流れ上のが上に居たとが居るしたのて寺川では称名瀧に次での壮観であらう。

◎閉鎖出し、忽ちの土夥せば上流堰堤の高さは十間ある、而して工事は初めて意義あるものとなるであらう。

◎何分此一号堰堤の高さは十間ある、而して工事は初めて意義あるものとなるであらう。

のものになると火薬で爆破せねばならぬ又土石を掘る際でも往々崩れ込むものもあって、其困難と危険は想像に余りある。

◎此白岩瀧の附近へは立山温泉から更に糧食を持参して我々を迎ひに来て居た、蓋し我々は此辺で中食を喫するものと思ったらしい、而して瀧の傍らの岩盤の上には天幕を張ってある、其れが即ち我々の休憩所なのである、鬼ヶ城で中食を認めてから一時間余りしかたぬが、御馳走が変わると又多少はやれるもの、涼しい瀧のシブキやら風やらを満身に浴びて、ビール、サイダに満腹する快味は熱塵炎砂漲る市人の到底味ふ事の出来ぬものである。

◎一時半頃に天幕の中から出た、之より先は山や川は益々荒れ果てて、処々新しく崩壊した跡が見へる、其れから出原川や泥谷川の砂防工事を途すがら見て、温泉に着いたのは二時半頃であった、芦峅から温泉まで実測四里三十町である。

立山温泉遊記　（六）

▼温泉の大宴会

◎我々が温泉へ着くと組織変更後の社長たるべき杉田八郎左衛門君、嘱託砂防医の杉下勝太郎君其他の砂防吏員等が丁寧に迎へた、我々は新浴場の背後なる特別座敷に案内を受けたが、山路を廻し中の目を美かかっ人たでたの運しぶか茶を入れた五里、歩いて居るのでで可なりの疲れが出居さうでである、先目的地よに着

も入浴と汗浸みた洋服を浴衣に着換へ、一浴を試みた時の快感は到底筆紙の尽し得る処ではない。

◎入浴後涼風の吹入る座敷に転がって居る、余り心地が良いので身体の目方が五六貫も軽くなったやうな気がする、菓子は出すに随って平げられ、暫くは女中が茶や菓子の女中三人あるが其中お関さんは云ふも目を迎へたる温泉の料理人の妻君が昨年来の体白の頗る豊満な肉体の所有者あるかの増美人がるあ、一行の誰かが直ぐ之を発見して、意味ありげに未見なの人居る、吹聴しが、久保技手君は彼は決して怪しいものでない。

歩いたが、安政年間大鳶山崩壊の際湯川此の湧出る流源の地は元湯川の左岸にて到る底跳足で其れ大部分は湯川に捨て湯ては岩石の処間に電の

学々問にがあって品性高潔でと熱心に其品行を保証して居た。

◎暫く休んで温泉の源を見に行った、源は湯身が変更した為め、いまは右岸にあるのださうである。

◎湯元を見て帰ると最早五時に近かった、六時頃に夕食の膳が出た、芸妓をこそあねらと、我々が遠来の労を慰むる為めとあっての膳が出た、味を集めて、思ひ掛けぬ鯛の刺身もあった、大鯛の焼山出物海の珍味あった、其他一二種の洋食もあり、ビール、サイダ及び日本

川の右岸の低きに処にあり、之を樋で左岸に導き更に水車仕掛けの電灯ポンプ（）を以て高き浴場に送る設備にはなっ居る、細きけ

嘶筒吊って濛々と立る昇ブラブラ居るの橋を渡っ川の源での右岸にて行くと其の処に

線煙が濛々とあ立昇っ居るの橋を渡っ川の源での右岸にて行くと其の処に

酒は泉の如く、電灯がない為め日が暮れるとランプが点いたが蚊や虫がない為め清々と心地が宜い、殊に此処は海抜四千五百尺の高地なれば黄昏頃より急に涼しくなって、浴衣では寒い寒い綿衣を要求するもの多く、女中なども何時の間にかで袷を着て居るのがある。

◎真夏とは云ひ幾らか飲んでも騒いでも此処は汗などの出る気遣いなく、熱からず寒からず、仙境も斯くやと思はるる頃菅原君頻りに珍妙な里謡を唄ってる計り、玉山将軍に崩れ、とする杉田君は樵夫共の音楽の心得あるものを連れて来て胡弓尺八洋琴などの合奏をやらせる、番頭も踊れば主人も唄ふ遂にには魚住君迄も踊り出し、山鳴り谷響きて、明日は雨ともならんかと思はる程、大米突（だいメートル）を上げて漸く宴を徹したのは十時頃、昼の疲れもあるので一同は直ちに寝に就いた。

立山温泉遊記　（七）

▼大鳶山に登る

◎開くれば十九日、砂防人夫が起床合図の鐘の音に驚かされ、五時頃に床を出た、窓を開けると松尾山の頂には東雲（しののめ）の彩り赤く、朝の嵐は寒さを感ずる程に吹いて来る。

◎今日も空晴れ好天気のやうであるが、杉田君は午後には夕立が降るかも知れぬと云ふ、其れは湯川の下流に方って（あたって）鍬先山（ママ・鍬崎山）と云ふ大きな山が見へる、此の山の頂に雲ある時は如何に好晴な日でも必ず空模様が悪くなる、之は多年の経験に由って殆ど誤りがないとの事である、成程鍬先山の頂は雲に隠れて居る、而して其雲が次第次第に附近の山々に翼を擴めるやうである。

◎今日我々は如何にして暮すか、一日温泉で寝転んで居るも白くない、其処で前夜余と杉木君は湯川を遡って峠に登りも、面れから龍王嶽、浄土山、天狗平を屋根伝へに跋渉して立山に登り、弥陀ヶ原松尾峠を経て帰って来る筋書を作って杉田君にに相談ですると頗る頑強に反対した、杉田君は行程は極めて危険ですあるのみならず、途中で一夜野宿せねばなら其行なめ危険な事をするよりも出し原（ママ）川水源地の砂防工事を観んでて貰ひ有名な大鳶山に登る事に決した。

◎今日は行けないと杉田君は云ふ、大鳶の絶頂までは一里半もあって道は非常に嶮しいのである、何でも宜いから行ける処まで行かうと、朝食を認め軽装して七時頃に温泉を出た、一行は杉木君及び余の外に菅原、金山、杉田、寺井の諸君で渋谷魚住の両君は脚を痛めたとて加はらなかった、而して久保君は案内役として同道された。

◎処が朝起きると空模様が怪しいから今日は迎も大鳶の絶頂まで行けないと杉田君は云ふ、大鳶の絶頂までは一里半もあって道は非常に嶮しいのである、何でも宜いから行ける処まで行かうと、朝食を認め軽装して七時頃に温泉を出た、一行は杉木君及び余の外に菅原、金山、杉田、寺井の諸君で渋谷魚住の両君は脚を痛めたとて加はらなかった、而して久保君は案内役として同道された。

◎温泉の背後の妻ウツギの繁茂せる高原を通り抜けて泥谷川に出た、此辺の砂防工事は明治四十年頃に施行したもので、石積工事も積苗工（つみなえこう）此好く（みなよく）成功して居る、工事其から泥谷川を渉って大鳶山を目掛けて登った、此辺は以前砂防

人は登り、通行した小径は、あるが、一坂時は漸次急且つ嶮と後ろ眼下休んどすが登れ池や両岸の湯川の計右岸にあは出し原川測りて見えて赤下し原くの出て来る。

◎尚一時間余も登ると一つの山の絶頂に来た、最早大鳶山の山頂に来たのかと思ふとまだ、山の此処は小鳶とか云ふので一つの山の分し水嶺を為し出し原、泥谷、湯川の三支流は何れも此処を水源の地と分して流れて居る。

立山温泉遊記（八）

▼本年度の砂防

◎今我々の立って居る処は俗に鳶山と称する山の頂上で、松尾峠の殆ど水平のやうな、此山は出し原、泥谷、湯谷三支流（メートル）の水源地なる砂防工事である。

◎常願寺の砂防工事に就ては昨年の夏詳しく書いた事実を施した事を施してある事である、抑も此危険な箇処で工事をしたものは人か猿か将鳥か（はたとりか）、殆ど人間業とは思はれぬ位である。

◎而して此山は傾斜が極めて急であるから、既に砂防工事を施した処でも再び崩壊し、又は崩壊せんとして大なる亀裂を生じて居る処が処々にある、以て如何に此方面の防工事（ママ）砂防工事かなるものの難事業であるかを知るべきである、従来積苗や石張りに重きを置いた砂防工事が、近年堰堤工事に重きを置くに至ったのも即ち之れが為めである。

◎是陳腐なる筆を費す必要はないと思ふが、昨年の夏詳しく書いた事実を施した事を施してある事である、抑も此危険な箇処で工事をしたものは人か猿か将鳥か（はたとりか）、殆ど人間業とは思はれぬ位である。

◎而して此山は傾斜が極めて急であるから、既に砂防工事を施した処でも再び崩壊し、又は崩壊せんとして大なる亀裂を生じて居る処が処々にある、以て如何に此方面の防工事（ママ）砂防工事かなるものの難事業であるかを知るべきである、従来積苗や石張りに重きを置いた砂防工事が、近年堰堤工事に重きを置くに至ったのも即ち之れが為めである。

◎我々は記念の為め鳶山の頂上に杉田君あは山に弁当君はる今日ら余上天等では撮影更にし大鳶山時計初の絶を見折らにるくし角不もと登十時過の怨までん過

模様を呈して居た。

◎一行は湯谷川の水源地から下山の途に就いた、此処は明治四十五年とかに大崩壊をしたと云ふので、鉄気を含んだ赤黒い岩石が、血に染みた悪魔の死骸が転がって居るやうに一面に其処等に散乱して居る、我々は此小流れ沿ふて砂防工事の状況を視察しつつ山を下ったが、全然道なき所なれば行路頗る困難を極め、杉木君の如きは堰堤の上から一間計り辷り落ちて一行の肝をヒヤさしたが、幸に両手に微傷を負ふただけで事済んだ、此湯谷川は下流に下るに随ひ瀧多く到底其処から下る事が出来ないので、左岸の森林の間に小径を求め、温泉に帰着したのは一時頃であった。

立山温泉遊記（九）

▼温泉半日の休養

◎大鳶から帰って湯に入り飯を食い終ると彼れ此れ二時であったが、之から半日休んで静養する事にした、我々は此処い（ママ）来って以来忙しかったので、未だ温泉の話も詳しく承る事が出来なかったが、茲に至って漸く其機会を得た。

◎立山温泉は従来杉田君の所有であったが、今度之を十万円の株式会社としたのである、而して現在の立山温泉の建物地所其他の総ての財産、実測七八百町歩もあらうかと云ふ山林迄も加へて、之を価格四万円と見積り之を会社で買収し、資本金十万円の内七万

円は杉田君の出資額で、他の三万円は五百石附近の有志諸君が出資して居るのである、而して現在は其二分の一を払込みて温泉買収と共に客室の増築及改良を行い又雇人等をも増して大いに其設備を改め以て浴客の吸収を図る計画であると云ふ。

◎今や砂防道路が出来て温泉行きが便利となったので浴客は漸次増加する、殊に七月の末から立山登山者が近年驚くべき勢いを以て増加したので、現在の設備では温泉は狭隘を感ずる、故に近々新浴場の前方にある古き建物を破壊して茲に広大なる一棟を建てる筈だと云ふ、杉田君は薬師堂から温泉の縁起を持出して来て見せられたが、其れには面白い神話的の事が書いてあった。

◎温泉附近は何分深山であるから動物は少ないやうだ、獣類は滅多に見ることは出来ぬが、森林中には杜鵑（ほととぎす）、山鳩、鶯が沢山居る、之等の鳥の啼声が長閑で悠暢（ゆうちょう）で何とも形容の出来ない霊妙な感じを人に与へる、事に杜鵑の啼声は近くで聴くよりも遠くで聴く方が一層幽妙である、又温泉の背後の灌木の原の小流れなどには河鹿（かじか）も少し居るやうだ、大鳶からの帰り路に流れの縁で河鹿の麗朗な鳴声を聴いたから、一行は之を捕へるべく其処等を捜索すると数疋の太った河鹿を発見した、漸くにして之を捕へ温泉へ持帰って河鹿通の人夫に鑑定を乞ふと、悉く只の蛙であるとの事、一同オヤオヤと開いた口が塞がらなかった。

◎午後六時過ぎから砂防吏員一同を加へて晩餐会が始まった、総人員二十人計りもあって此温泉では希有の大宴会である、御馳走

立山温泉遊記（十）

▼温泉を辞す

◎明日、今日は逾よ温泉を辭し、二十日帰りて夜の富晩す る予日は定が崇で会浴が定 ッあ温泉を試 ッか ら室イ寝 ッ過早 ッ朝 ッ午 ッ後 ッ五 ッ時 ッ百 ッ石 ッ発 ッ五 ッ筈 ッ時 ッで ッの ッ野 ッ実 ッ

◎朝食を終ると同時に出発の準備に係った、杉田君は此温泉特産の蓬ねりと湯の花を土産物として我々に贈られた、共に座敷中腸胃病恰なもどの玩具箱効の ひあるのだ特 ッくりと返したの事 ッ我々が出発準備の為 ッ而 ッ杉 ッ右 ッ往 ッ左 ッと恰 ッな渋谷君はを襯衣（シャツ）が見当狼藉と出発準備た ッ裸体 ッ探 ッし ッた ッの ッ何 ッま ッで ッた ッう ッで ッて ッあ ッも ッ

◎七時半頃温泉を出発した、杉田杉下両君及砂防吏員の重なる疾い、出し原の堰堤工事を視て一寸時間を費したが、後は所謂一瀧の清水を掬して汗を拭ふた。

瀧下で一先づ休憩し、

◎此処から道は次第に良くなるので足は益々捗る、是れ又一気に藤橋まで下り、温泉の荷物取次所に入って時計を見ると十時を少し過ぎている、予定よりも早く到着し、まだ時間は早いが日程通り此処で昼食を認めた。

◎此時上市町の松井宗八君等の経営に係る立山鉱業所の使いなりと一人の男が来て、鉱業所では今記者団の視察を乞ふべく昼食の要意（ママ用意）をして待って居るから、今直ぐ一緒に行って貰ひたいと藪から棒の話である、立山鉱業所とは此藤橋から十六七町計り称名川に沿ふて遡った処にある、硫黄製造其他の鉱業を経営する工場である。

立山温泉遊記（十一）

▼立山鉱業の事業

◎一九日の午後であった、何処からか立山温泉へ電話がかかって、立山鉱業所を視察して貰ひたい途の事であった、我々は立山鉱業所は松井君等の経営たる事を知るも、何処にあるかを知らず、且つ当時一行中には不在のものもあったので、後で相談して置かうと答へて電話を切った、然るに鉱業所では我々が視察を承諾したものと決定して、我々を迎ふる準備を為し、我々の下山する時間を見計らって藤橋まで事務員を出迎はしたのである。

◎我々は成べく松井君の希望に副へ（ママ）たいが、今となっては其時間が無い、殊に日程以外に十六七町の山路を往復すると云ふ事は容易の事ではないので、我々が此処で食事をして休んで居る故、松井君に此処まで来て貰ひたいと其事務員を返してやった、事務員は宙を飛んで鉱業所に駆付け小一時間も経つと松井君は人

夫にビールや缶詰を背負はせて、余程急いだものと見へ流汗淋漓としてやつて来た。

◎我々は既に満腹して居るのに松井君は頻りにビールを侑める、我々は成べく詳細に鉱業所の内容を承りたかったが、前途を急ぐ為ホンの概略を聴集した、松井君の説明に依ると同鉱業所は硫黄、二酸化炭素、硫黄華、カーワイド（ママ、カーバイト）苛性曹達、曹達灰、窒素肥料等を製造する目的で、之が為めに称名ヶ瀧を利用して六千馬力の発電を計画し、硫黄採鉱の為には地獄谷三十万坪の鉱区を出願して既に許可を得て居るが、此硫黄鉱は七十パーセント以上の純分を含み、松井君は自ら日本一と称して居る、又一カーワイドや曹達の原石採掘の為め立山国有林字七姫と云ふ処を数千万歩出願して居るが、其原石石灰岩は頗る純良なるものに既にて藤橋附近には露出して居るのを見ると色は純白である。

◎地獄谷から硫黄を出すには弥陀ヶ原に林道を設け、其処に運送自動車を通じ、又製造所と弥陀ヶ原との間は千仞の断崖を為し、自動車を通ずる事が出来ないので、此処は運行機を以て鉱石を運ぶ予定である、経営者は松井宗八及松本常之氏等であるが、其後援者には三井系の成金小塚貞美氏であるから資金の供給、及製品の販売等には毫も心配を要せぬと松井君の鼻息は頗る荒い、松井君の話では八月十日頃に硫黄鉱の出し初をする予定だとの事であった。

◎我々は非常に急いで居るので、早々之れだけの話を聴き何れ製造所は後日再び出掛けて拝見すると約束して松井君と別れ藤橋を出発した、半ば駆足で歩いたので芦峅寺まで約一里半の処を一時

間で着いた、寶泉坊に預けて置いた荷物を受取って、更に一里計り歩いて千垣に着くと五百石から腕車が迎ひに来て居た、此処で草鞋を靴に履換へ逾よ車上の人となった。

◎五百石に着いたのは四時少し過ぎ、まだ時間があるとて同地の東雲楼に案内され、此処でビール等の饗応を受け、停車場に行くと軽鉄の青山君が出迎はれ、五時杉木菅原の両君並に五百石有志諸君に別れて軽鉄に乗り、帰富の途に着いた。（完）